

煎茶用新品種「みなみかおり」について

上野貞一・古野鶴吉 (宮崎県総合農業試験場茶業支場)

Sadaichi UENO and Tsuruyoshi FURUNO : A Newly Registered Tea Cultivar "Minamikaori" Suitable for Green Tea

宮崎県総合農業試験場茶業支場 (茶育種指定試験地) で育成された「宮崎5号」が、1988年5月に茶農林39号として登録、「みなみかおり」と命名されて普及に移されることになったので、その来歴、育成経過、特性などについて報告する。本品種の育成にあたって、多大のご協力をいただいた関係機関の各位に、厚く謝意を表する。

1. 来歴及び育成経過

1966年に、良質の「やぶきた」を母とし、中国及び台湾より導入したもの (CK-20×青心烏龍) のF₁である、耐寒性、耐病性の強い中間母本「宮A11」を父として、交配を行った。

1968年に個体選抜、'72年から「Mi74-41」の系比番号で栄養系比較試験に供試した。'79年以降「宮崎5号」の栄養系名で、栄養系適応性検定試験、特性検定試験及び関係府県の品種選定試験において、地域適応性などを検討してきた。

2. 特性の概要

樹姿は中間型で、株張りは優れている。葉の形、大きさは「やぶきた」並みの長だ円形、やや大形で、厚さは新葉時には差がなく、成葉ではやや厚い。葉色は「やぶきた」よりやや淡い黄緑色、光沢はやや少なく、葉の表面は平滑、葉縁の波も少ない。新芽の形状は、「やぶきた」に比べ節間長がやや短く、百芽重のやや大きい芽重型である。萌芽期、摘採期は、「やぶきた」とほとんど差のない中生種である。挿し木発根性は優れ、育苗が容易である。定植後の活着も良く、幼木期の生育が優れ、成園後も葉層が厚く、樹勢は旺盛である。

「やぶきた」に比べて単位面積当たりの芽数がやや少なく、百芽重がやや大きく、結果的に生葉収量は約20%の多収になっている。

煎茶としての品質は、「やぶきた」と同等の上の中に評価される。特に色沢はさえた緑色で「やぶきた」を越えており、香気は「やぶきた」とは異なるすっきりした清涼感があり、滋味はわずかに苦渋味が強い。

耐寒性は、赤枯れ、青枯れ抵抗性ともに「やぶきた」より一段改良されて、やや強であるが、裂傷型凍害抵抗性は、やや弱である。耐病虫性は、炭そ病抵抗性が「かなやみどり」よりさらに勝る強、輪斑病抵抗性は「かなやみどり」並みのやや強であり、カンザワハダニによる被害度も小さい。

3. 適地など

「やぶきた」と萌芽期、摘採期がほとんど同じで、耐

寒性、耐病性が強化されて地域適応性が大きいので、「やぶきた」が栽培されているところには、ほぼ好適すると考えられる。特に重要病害である炭そ病、輪斑病に対する抵抗性が大幅に改善されているので、これらの病害の多発地帯に導入し、薬剤散布回数を軽減することができる。しかしながら、裂傷型凍害抵抗性はやや弱いので、この常発地には避けた方が安全である。

4. 栽培上の注意

樹勢が強く、株張りが優れるので、成園化するの容易であるが、芽数がやや少なく芽重型となりやすいので、幼木期の仕立てや整せん枝の方法などにより、芽数を確保することが増収につながる。裂傷型凍害抵抗性は強くないので、幼木期は秋肥の施用を早めに行い、間作、被覆などの軽減対策を取り入れることが望ましい。

第1表 「みなみかおり」の特性 (育成地及び九州各県の平均)

項 目		みなみかおり	やぶきた	かなやみどり
一 番 茶 萌 芽 期		-1 H	0 H	+3 H
生 育	樹 高 cm	78.5	80.7	71.0
	株 張 cm	59.5	52.7	62.8
	生 育 概 評	優	中	やや優
収 量 性	芽 数	104.6	123.8	152.8
	百 芽 重 g	55.0	45.8	43.1
	一 番 茶 収 量 指 数	120	100	134
	夏 茶 収 量 指 数	121	100	122
耐 寒 性	赤 枯 れ 抵 抗 性	やや強	中	やや強
	青 枯 れ 抵 抗 性	やや強	中	やや強
	裂 傷 型 凍 害 程 度	やや弱	中	やや強
耐 病 性	炭 そ 病 抵 抗 性	強	弱	中
	輪 斑 病 抵 抗 性	やや強	弱	やや強

第2表 一番茶煎茶品質 (育成地及び九州各県の平均)

品 種	形状	色 沢	香 気	水 色	滋 味	合 計
みなみかおり	8.5	8.7	8.1	7.5	7.3	40.1
やぶきた	7.9	8.0	8.1	7.9	7.9	39.8
かなやみどり	8.0	7.8	7.4	7.6	7.4	38.2